
研究ノート

スペイン・ガリシアにおける移民の歴史と現在
—ラテンアメリカとヨーロッパの狭間のガリシア—

竹 中 宏 子^a

History and Actuality of Galician Emigrants:
A Galicia (Spain) Shared between Latin America and Europe

Hiroko Takenaka^a

(^a Faculty of Human Sciences, Waseda University)

(Received : April 28, 2010 ; Accepted : July 7, 2010)

Abstract

Galicia, one of the 17 autonomous communities of Spain, has its own language (*gallego*), different from Spanish (*castellano*), as well as Catalonia and Basque Country. Galicia is also generally known as a “region of emigrants” in Spain. This article explores the process in which the representation of Galician emigrants reveals the characteristics of Galicia itself, focusing on the history of emigrants to and from Galicia, and examines the actual relationship between Galician emigrants and people remaining in Galicia.

This article analyses the history of Galician emigrants, concentrating on twentieth century, which took place roughly in two periods (from 1900s to 1970s, and from 1970s to the presence). Based upon this analysis and my own fieldwork, the following two points can be considered. First, “Galicianism (*Galleguismo*)” or Galician regionalism developed as “long-distance nationalism” (Anderson, B.) primarily among emigrants in Latin America after the Spanish Civil War (1936-1939) and the establishment of the Franco dictatorial era; the relationship between Galicia and Latin America established through emigrants during these periods is now considered to be one of Galicia’s most characteristic features. Secondly, Galician migrant workers who stayed in other industrial cities within Spain did not contribute substantially to Galicia’s local image as well as the emigrants to Latin America; their migrant phenomenon is still classified as a “vivid memory” in the consciousness of Galician history shared among people remaining in Galicia at present.

Key Words : History of Emigrants, Representation of the Locality, Galicia, Latin America, Europe

1. はじめに

スペインは他のヨーロッパ諸国と比較して、相対的に地域主義が根強い国といえる。それぞれに固有語をもつカタルーニャ地方やバスク地方の地域主義

の展開を背景に、これまでも「多言語国家スペイン *España plurilingüe*」、「多民族国家スペイン *España plurinacional*」という言葉が広く流布してきた。また、国民国家スペインの一体性を強調する立場から

^a 早稲田大学人間科学学術院 (*Faculty of Human Sciences, Waseda University*)

も、「スペイン人」は歴史的に形成された「諸民族 *naciones* からなる民族 *nación*」であるという言い方がしばしばなされてきた [立石 2002: 14]。

こうしたスペインの地域主義について語られる際、カタルーニャやバスクは我が国においてもよく知られた事例であるが、同様に固有語「ガリシア語」を有するガリシア地方の事例に関しては、これまで紹介されることが少なかった。

しかし、ガリシア語を母語とする人の割合はバスクやカタルーニャよりも高い¹⁾。バスクやカタルーニャと同様あるいはそれ以上に、ガリシアの地域主義（ガリシア主義）は強力だと想像されよう。しかし中塚によれば、固有語に根ざしたガリシア主義は強いものではないという。そして、地域主義の誕生がバスクやカタルーニャより遅れ、その展開に困難をきたした原因として、次の4つの原因を指摘している [中塚 2002: 199-201]。

第1に、同地方には、ガリシア主義の根拠となる政治的「自治」の歴史が存在しなかったからだ。地方特権 *fueros* による独自の政治制度をもった歴史的経験もなく、かつてはイベリア半島最大の王国で後にスペインの中央政権となったカスティーリャと異なる王国を形成したのも、ごく短期間にとどまった。

第2に、同地方では、「ガリシア人」意識を促すための経済的一体性も欠いていたからだ。詳細は後述するが、ガリシア経済の中心である農業は小規模にとどまり、工業的にも発展は少なく、さらに資本はカタルーニャなどの外部に握られていた。

第3に、同地方では、宗教的要素もガリシア主義に寄与しなかったからだ。日常の社会生活は教区が基礎であったが、教会ではガリシア語は使用されなかった。また、神学校でもガリシア語を母語とする学生が7割に達していたにもかかわらず、カスティーリャ語で教育が行われていた。

そして第4に、同地方が移民送出地域であったからである。外からの移民が入らない状況は、一方で地域内に均質性をもたらした。だが他方で、その「よそ者」の不在は、外部に対抗する形で形成されやすい「われわれ意識」を芽生えにくくもさせていた。また、外への移民は社会の安全弁となり、社会矛盾のしわ寄せを被り易い下層若年層の地域外流出を招いた²⁾。ガリシア人の「われわれ意識」は、むしろ、異なる民族集団の下に晒される移民先で獲得された

のである。

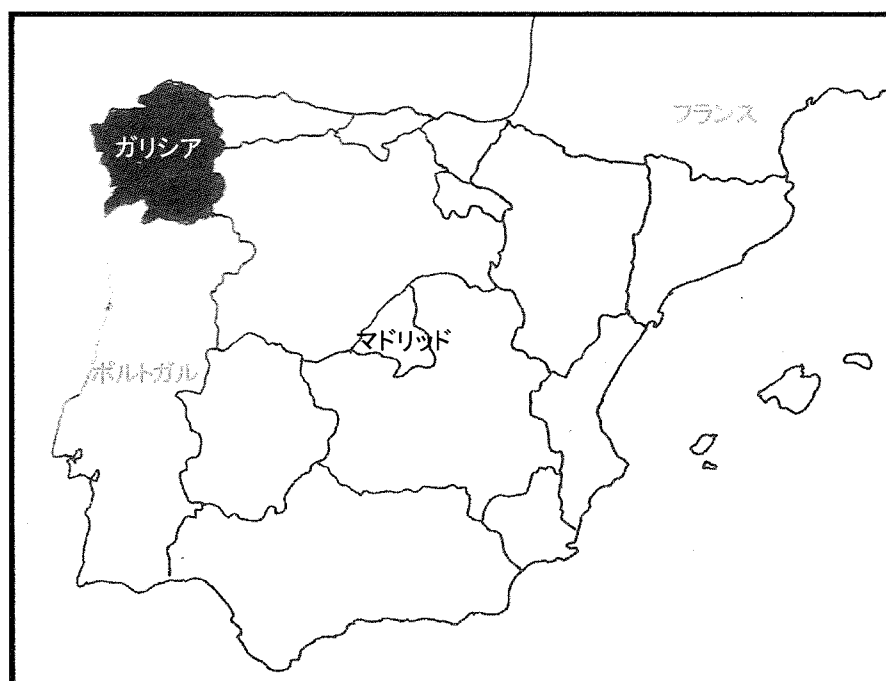
以上の指摘を踏まえるならば、バスクやカタルーニャにおける地域主義とは異なる、ガリシア主義の特殊性が浮かび上がる。すなわち、ガリシアのガリシア主義は、ガリシア内部の動きをみるだけでは捉えきれず、ガリシアとガリシア外部との関係性、具体的にはガリシア人移民の動態に着目する必要性である。このガリシアとガリシア移民の関係に関して、作家であり歴史研究者でもあるムラードは、『ガリシア』の大部分はガリシアの外で起こり、『ガリシア』はガリシアの外にある」と発言している [MURADO 2008: 119-120]。つまり、移民先の地で作られる「ガリシア」こそが真のガリシアなのであり、これはガリシア人を理解する上で最も重要な要素の一つであると指摘しているのである。

本稿では、ガリシアの本質（ガリシア性）が、流出した移民先で維持された、あるいは「つくられた」点に着目して、ガリシアの地域性を捉える一つの手掛かりとして、当地域とガリシア移民の関係を考察する。ガリシア移民の歴史を把握し、出身地域への社会的影響を検討するが、とくにガリシア主義と移民との関係を明らかにするため、20世紀以降に焦点を絞る。さらに筆者がフィールドで得た口述資料や参与観察に依拠しながら、現在ガリシアに暮らすガリシア人と移民とのつながりの現状についても報告する。

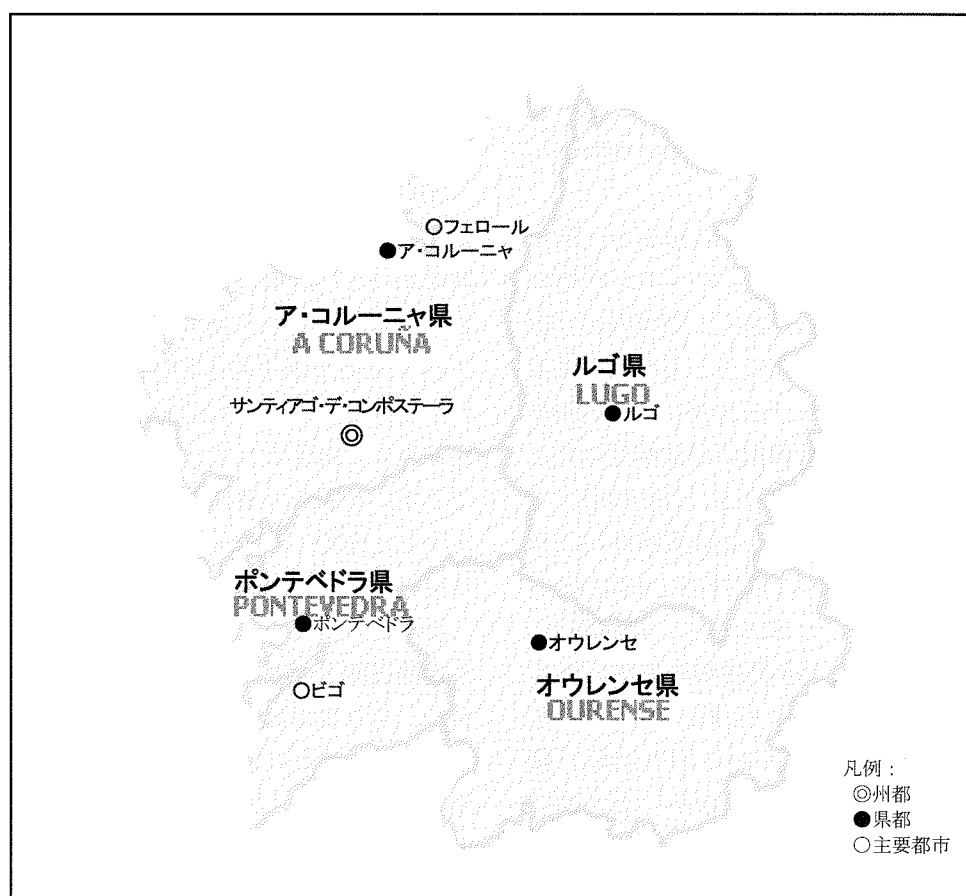
2. ガリシアの社会的背景

具体的内容に入る前に、前提となるガリシアの社会的背景を概観しておきたい。

スペインは現在17の自治州 *Comunidades Autónomas* に分かれており、ガリシア州はイベリア半島北部の西端に位置している [地図1]。地理的な位置からもわかる通り、ガリシアは大西洋気候の影響を大きく受けているため、スペインでは雨量が最も多く多湿な地域である。年間平均気温も9℃から15℃と国内ではそれほど高くなく、冬は海岸部で10℃、内陸部で5℃程度であり、夏も20℃前後である。面積は29,574km²で国土全体の約5.8%を占める。人口は2,796,089人（2009年統計）で、この数字はスペイン総人口の約6%に相当し、17自治州中5番目に位置する。ガリシア州は4つの県に分かれており（ア・コルーニャ県 *A Coruña*、ポンテベドラ県 *Pontevedra*、ルゴ県 *Lugo*、オウレンセ県



地図1：イベリア半島におけるガリシア州の位置



地図2：ガリシアにおける4県と主要都市

(出典：http://www.cptopt.xunta.es/portal/cidadan/cache/offonce/lang/gl/pid/185より筆者加筆)

Ourense)、州都はサンティアゴ・デ・コンポステーラ *Santiago de Compostela* である〔地図2〕。これら4県は中央を南北に走る山系によって、ルゴ県とオウレンセ県の東部とア・コルーニャ県とポンテベドラ県の西部に分けられ、東部は内陸性気候に、西部は海岸性気候に属している。この海岸地帯と内陸部という区分は、社会的格差の違いとも重なる。つまり、一部の例外を除くと、貧しい内陸部に対して海岸地帯は資源が豊富で農業の面でも発展しており人口も集中しているのである [RODRÍGUEZ GONZÁLEZ 1997-b : 117]。

しかし、スペイン国内においてガリシアは、農業や漁業を産業の中心とする「田舎 *rural*」という画一的なイメージが強い。それには観光産業部門における同地域の表象戦略も影響していると考えられる。世界的に有名なサンティアゴ巡礼路の終着地点であるサンティアゴ大聖堂を除けば、漁港か、あるいは、なだらかな丘に広がる牛の放牧の風景が観光パンフレットに掲載される定番写真であり、「ご当地グルメ」の中心は、豊富な魚介類とガリシア産チーズが強調される。実際にマドリッドでガリシアに対するイメージを尋ねてみると、必ず、「遅れた (*retrasado*)」、「農業／漁業中心の土地 (*lugar agrícola/de pescadores*)」という言葉が人々の口にのぼる。

確かに、例えば1993年のデータを見ると、第一次産業の従事者は30.2%であり、スペイン平均の10.1%と比べるとかなり割合は高く、同地方に「田舎」というイメージを人々が抱くことも理解できる。しかし、現実にはそのイメージとは異なり、1980年代から、従来の社会・経済的構造に変化が見られた [RODRÍGUEZ GONZÁLEZ 1997-b : 115-116]。その結果、2006年には第一次産業の就業率は10.7%にまで落ち込んだ。これは人口にすると121,000人で、1986年の431,900人³⁾と比べると、20年間に、実に311,000人余りの第一次産業従事者を失ったことになる。逆に、工業は1986年と2005年を比べると、159,000人 (15.3%) から217,000人 (19.2%)、建設業は、69,600人 (15.3%) から125,000人 (12.0%)、そしてサービス業は、379,000人 (36.4%) から666,000人 (59.0%) と数の上では増加した。ただし、その効果は、第一次産業衰退の経済的損失を埋めるものではなかったという [NEGUEIRA ROMÁN, C. 2008 : 13]。すなわち、ガリシアでは農業中心の産

業構造からの脱却は、必ずしも経済的発展を意味しなかったのである。このように、ガリシアを「田舎」と見る外からのイメージとガリシアの実情との間に乖離が生じ始めたのは、ここ30年余りの出来事ではあるが、いずれにせよ、今日までの長い間、ガリシアが産業構造の近代化に「遅れた」地域であった事実がうかがえる。そして、同地域がこのように低開発地域であったことが、19世紀から20世紀にかけて多くの移民を送り出す原因の一つにもなってきた⁴⁾。

3. 20世紀におけるガリシア移民の歴史

ガリシアにおいて、移民流出の歴史は15世紀から始まったとされるが、21世紀に入る直前までガリシア域外に出て行く人は後を絶たなかった。行き先は、イベリア半島内の他地域、カリブ海を含むラテンアメリカ諸国、そしてヨーロッパ諸国で、その数は19世紀から20世紀にかけてピークをみる。ここでは、ガリシア主義との関係から、特に20世紀に焦点を絞り、ガリシア移民と地域としてのガリシアとの関係性を整理する。

3-1. 1900年代から1970年代：農村・漁村からの人口移動

20世紀初頭のガリシアは第一次産業で成り立っており、小規模な農村・漁村を多く抱える低開発地域であった [LOIS GONZÁLEZ 1998 : 36] [表1]。また、表2に示した通り、人口密度は非常に高く、スペインの全国平均を1960年代までは30人/km²ほど上回っていた。この状況に高い出生率という要素が加わり、結果として、人口を維持していくことができず、貧困から逃れるために人びとは新天地に向かった。当時、ガリシア人の多くは、キューバ、アルゼンチン、ウルグアイに移民した⁵⁾。

またこの頃になると、国内のインフラ整備、交通や運輸技術上の発達も移民流出を後押しした。すなわち、それまでは港町出身、もしくはその周辺地域住民以外の移民は稀であったが、ガリシア域内の交通網が発達することで、ガリシア全土から移民船が出る港まで人々がアクセスすることが容易になった。また、収容人数が多く速度の速い大型船が開発され、乗船時間も短縮され、さらに出航数が増え、出航費用も値下がりした [DE JUANA, J. y VÁZQUEZ, A. 2005 : 433] [表3]。多くのガリシ

表1 就業人口構成(%)：全国平均とガリシア

年	部門	全 国 平 均			ガ リ シ ア		
		農牧林漁業	鉱工業・建設	サービス	農牧林漁業	鉱工業・建設	サービス
1900年		70.0	14.2	15.7	85.9	5.7	8.1
1910年		68.1	14.9	17.1	83.5	7.2	9.2
1920年		59.0	21.0	20.0	82.8	7.3	9.9
1930年		47.2	25.7	27.1	65.3	14.7	20.0
1950年		49.6	25.5	24.9	71.9	13.6	14.5
1960年		39.7	28.7	31.6	67.8	16.0	16.2
1970年		24.9	37.4	37.8	49.0	23.4	27.7
1981年		15.7	36.4	47.9	37.0	27.4	34.0

(出典：中塚 2002, p.202)

表2 ガリシアとスペインにおける人口密度の変移とその比較

	①ガリシア (人/km ²)	②スペイン (人/km ²)	①－② (人/km ²)
1860	61.12	30.98	30.14
1877	62.77	32.92	29.85
1887	64.36	34.75	29.61
1900	67.28	36.84	30.44
1910	70.1	39.59	30.51
1920	72.86	42.33	30.53
1930	75.77	46.86	28.91
1940	84.79	51.49	33.30
1950	88.44	55.65	32.79
1960	88.43	55.65	32.78
1970	87.77	67.21	20.56
1980	93.55	74.71	18.84
1991	93.31	78.05	15.26
2001	92.50	80.90	11.60

(出典：DE JUANA, J. y VÁZQUEZ, A. 2005, p.413 を基に筆者作成)

表3 ラテンアメリカに向かったガリシア移民の変化

	移民の数	年平均	出身地域	交通手段(種類)
1835-46	3,741	312	港町	帆船
1847-64	35,094	1,950	海岸地域またはその周辺	帆船または蒸気船
1865-85	131,950	6,283	海岸地域、その周辺地域、または内陸部	蒸気船
1886-03	315,264	17,515	ガリシア全土	蒸気船
1903-18	648,460	43,321	ガリシア全土	蒸気船
1919-36	485,972	24,299	ガリシア全土	蒸気船または電気推進船
1946-90	402,328	8,941	ガリシア全土	電気推進船または飛行機

(出典：DE JUANA, J. y VÁZQUEZ, A. 2005, p.433 を基に筆者作成)

ア人にとって、以前より移民し易い状況が用意されたのである。

当時ガリシアでは、高い出生率の割に全体の人口は際立った増加傾向にはない。その背景には、こうした移民流出があった。例えば表4を見ると、アメリカに向けて移民が多く流出した1910年から1930年には166,692人の人口増であった。だが、世界的な不況の蔓延、およびスペイン市民戦争⁶⁾や第二次世界大戦により移民が少なかった1930年から1950年には377,919人と2倍以上に増加している〔表4、表5〕。ガリシアにおける移民送出は、人口増が過度にならないような調整機能も果たしていたと考えられる。移民先からの仕送りが、ガリシア経済を支えていたことは事実である。しかし、本来ガリシアの活力になり得た人材である移民（特に働き盛りの若者）流出は、ガリシアにとっては損失でもあった。

先述したように、移民流出はスペイン市民戦争によって一時切断された。1936年半ばから1945年の間には、経済移民よりも政治移民による数の方が多い

表4 ガリシアにおける人口の変移（1787年～2001年）

年	ガリシア	人口増加率
1787*	1,406,567	
1797*	1,450,000	+3.08
1824*	1,585,419	+9.33
1844*	1,720,929	+7.30
1857*	1,749,965	+1.68
1860	1,799,224	+2.81
1877	1,842,517	+2.71
1887	1,888,640	+2.51
1900	1,980,515	+4.53
1910	2,063,589	+4.19
1920	2,124,244	+2.93
1930	2,230,281	+4.99
1940	2,495,860	+11.9
1950	2,604,200	-4.34
1960	2,602,962	-0.04
1970	2,583,674	-0.74
1981	2,753,836	+6.58
1991	2,720,445	+1.21
2001	2,695,880	-1.01

（出典：DE JUANA, J. y VÁZQUEZ, A. 2005, p.396）

*この年の数字は推定である（正確な統計は1860年から）。

表5 ガリシアからの移民流出数の変移（1921～1961年）

年	移民の数(人)
1921	25,436
1922	32,410
1923	50,667
1924	45,033
1925	35,499
1926	25,800
1927	26,679
1928	29,925
1929	32,719
1930	28,505
1931	11,876
1932	9,409
1933	7,208
1934	9,126
1935	10,133
1936	7,855
1937	184
1938*	15
1939	140
1940	916
1941	1,873
1942	739
1943	450
1944	423
1946	1,680
1947	6,250
1948	10,367
1949	21,110
1950	27,381
1951	25,000
1952	26,070
1953	23,543
1954	22,638
1955	29,493
1956	22,890
1957	27,422
1961	23,389
1962	37,697
1963	26,750
1964	28,313
1965	31,815

*ア・コルーニャ県とポンテベトラ県データのみ合計である。

（出典：COSTA CLAVELL 1983, pp.131-132 に筆者が手を加え作成）

表6 ガリシア人の移民先とその数

年 \ 行き先	イベリア半島内 (人)	ヨーロッパ (人)	ラテンアメリカ (人)
1961	5,718	4,809	13,862
1962	12,168	11,680	13,849
1963	－	15,880	10,870
1964	－	25,063	3,250
1965	12,000	17,069	2,746

(出典：COSTA CALVELL 1983, p.132を基に筆者作成)

かったが、そこにガリシア人はほとんど含まれていなかった [DE JUANA, J. y VÁZQUEZ, A. 2005 : 435]。

スペイン市民戦争終結直後から1950年代にかけて、農村では、土地の生産性の低さに対し、出生率の増加が続く、という相対的過剰人口の問題が悪化していった。小規模な農村や漁村では、一層事態が悪化する。多くのガリシア人はそのような小規模な農村・漁村で生活していたが、増えすぎた村落人口を村内で維持することはますます困難になる。また、近隣の中規模都市にもそれに相応する雇用の数は限られ、農村からの過剰人口の受け皿にはなり得ない状況にあった。それゆえ、この時期、ガリシアからは経済移民がラテンアメリカに向けて大量に流出することになった。

やがて、移民先の選択にも変化が起きる。つまり、1959年まではラテンアメリカが中心であったが、1960年から1965年にかけて、ヨーロッパ諸国あるいは国内の他の地域に移民先（出稼ぎ先）が移行したのである [COSTA CLAVELL 1983 : 132] [表6]。ヨーロッパであればドイツ⁷⁾、スイス、フランスに、国内であれば最も工業化が進んだバルセロナ、ビルバオ、マドリッドなどにガリシア移民は向かった。このように20世紀前半の移民史を振り返ると、ガリシアでは従来からの生業である農業や漁業に関して、その改善や開発も進められてこなかった状況がうかがえる。

3－2. 1970年代から現在：移民送出から受け入れへの変化

1970年代初頭、オイル・ショックに始まる世界的な経済停滞により、ヨーロッパ主要国やスペイン国内の工業化地域において失業問題が浮上し始めると、

それらの地域にガリシア人が移民することは難しくなった。ヨーロッパ諸国への移民は激減し、雇用主との契約が成立したとしても、期間限定的な季節労働がほとんどであった（1983～2000年には全体の94.83%を占めた）。国内でもカタルーニャやバスク地方への移民は減り、国外の移民先は、ほぼスイスに限定されていた [HERNÁNDEZ BORGE 2003 : 156]。このような状況において、ガリシア域外に流出していたガリシア移民が、ガリシアに戻ってくるという現象が起きる [表7]。

このガリシア移民の帰還現象が、1970年から1981年における著しい人口増加率の説明となる [表4]。帰還したガリシア移民は、基本的に出身地域に戻る傾向にあったが、出身地と同一の村よりは、小規模ではあるが市役所が所在する近隣の町⁸⁾、または、より大きな行政区の中規模程度の町を居住地に選択する傾向がみられた。

では、このような帰還移民が帰る場所はどういう状況にあったのだろうか。本稿の冒頭で述べたとおり、20世紀半ばまでガリシアは、多くの人びとが小規模農村・漁村に分散して居住する形態から成る地方であった。しかし、1960年代に入ると、都市化が急速に進展する。特に1960年代から1990年代にかけて都市部における雇用が増加し、それに伴い農村部からの人口が都市部（ガリシア内の大都市、県都、または市役所が所在する町）に流出した [RODRÍGUEZ GONZÁLEZ 1997-b : 118-119]。つまり、ガリシアにおける都市部では、たとえ小規模な「町」であっても外部（主に農村）出身者を抱えることになり、この現象に伴い農村部の人口は減少の一途をたどり、過疎化の問題に苦しむことになる。

このような状況に、帰還移民は拍車をかけることになった。先に述べたとおり、帰還移民は農村地域であっ

表7 ガリシアにおける移民流入の変移 (1983～2001年)

	合計	スペイン人	外国人	スペイン人の割合 (%)
1983	2,740	2,705	35	98.72
1984	2,591	2,497	94	96.37
1985	2,536	2,429	107	95.78
1986	1,340	1,309	31	97.68
1987	1,493	1,457	36	97.58
1988	3,049	2,652	397	86.97
1989	4,348	3,826	522	87.99
1990	4,532	3,853	679	85.01
1991	3,557	3,064	493	86.14
1992	6,308	5,898	410	93.50
1993	5,155	4,916	239	95.36
1994	4,286	3,924	362	91.55
1995	4,354	3,997	357	91.80
1996	3,204	2,983	221	93.10
1997	5,908	5,028	880	85.10
1998	6,850	5,479	1,371	79.98
1999	8,506	6,099	2,407	71.70
2000	12,547	6,667	5,880	53.13
2001	11,395	3,967	7,428	34.81

(出典 : HERNÁNDEZ BORGE, J. 2003, p.158を基に筆者作成)

表8 出身地別人口構成(Viana do Bolo) : 1991年

総人口	1,573		
Viana do Bolo 以外の出身者	670		
近隣地域出身者	122	外国で出生した移入者	
オウレンセ県出身者	193	スイス	9
ガリシア出身者	56	ドイツ	13
		アルゼンチン	5
ガリシア以外のスペイン出身者		ポルトガル	37
バスク	26	フランス	22
カタルーニャ	24	キューバ	9
マドリッド	22	その他	6
サモラ-レオン	75		
その他	52		

(出典 : RODRÍGUEZ GONZÁLEZ, 1997-a, p.169 を基に筆者作成)

表9 出身地別人口構成 (Xinzo de Limia) : 1991年

総人口	4,972		
Xinzo de Limia 以外の出身者	2,706		
近隣地域出身者	1,034	外国で出生した移入者	
オウレンセ県出身者	834	スイス	43
ガリシア出身者	172	ドイツ	106
		アルゼンチン	10
ガリシア以外のスペイン出身者		ポルトガル	59
バルク	92	フランス	30
カタルーニャ	40	ベネズエラ	57
マドリッド	16	その他	39
その他	51		

(出典 : RODRÍGUEZ GONZÁLEZ, 1997-a, p.170 を基に筆者作成)

ても、市役所が所在するような、より「町」の方に好んで定住した。そこには既に都市化の影響で農村部からの人口が流入していたので、結果的に、外部出身者がかなりの数を占め、地元出身者を上回る人口構成をもつ町も出てきたのである〔表8、表9〕。これが、現在のガリシアの農村地域における町の最大の特徴である〔RODRÍGUEZ GONZÁLEZ 1997-a : 162-176〕。

現在、それまではイタリア、ギリシャと並んでヨーロッパの中でもさほど経済的に発展していないとされてきたスペインにも、外国人の移民が流入し、社会に大きな影響を与えるようになった。その結果、1980年代には移民を大量に抱える国に数えられるようになる⁹⁾。国全体から見ると、外国からの移民はさほど多くはガリシアに流入していない。これまで見てきたとおり、ガリシアにおける移民は帰還移民がほとんどで、外国人移民は少数であった。しかし、1981年から2001年の20年間で、ガリシアにおける外国人移民の数は2.4倍に増加したこと、2001年には外国人移民の数が帰還移民の数を上回った状況を考慮すると、今後は外国人移民による社会的影響が予測される〔表7〕。ただし、この点については稿を改めて論じたい¹⁰⁾。

4. ガリシアにおける移民の記憶

4-1. ガリシア主義とガリシア移民

本稿の冒頭で述べた通り、前節でみてきたガリシア移民の歴史は、現在ガリシアを表象する重要な要素の一つとなっている。ではなぜ、「貧困」と結び付き、必ずしも肯定的意味を持ちえない「移民」が

地域を表象する要素として選択されたのか。その手掛かりとして、本節では、大量に移民を送出した時代のガリシア主義の展開に着目したい。

ガリシア主義の誕生は19世紀にさかのぼるとされる。1950年代頃まで続くその間の動きは、「初期ガリシア主義」と称される¹¹⁾。ベラメンディによれば、初期ガリシア主義は、バスクやカタルーニャなどスペインの他地域で展開された地域主義運動に比べると、はなはだ未熟で政治的ダイナミズムを欠いたものであった。1930年代の第二共和制¹²⁾時代を迎えるまで、それはエリートや中産階級の間での意見に少し色がついただけの代物にすぎなかった〔BERAMENDI GONZÁLEZ, 2005 : 494〕。

スペイン市民戦争までの「初期ガリシア主義」に関して中塚は、「ガリシア・ナショナリズム前史」と、「ガリシア・ナショナリズム政党誕生」の時代(1931年～)の2つの画期に分けて整理している〔中塚 2002 : 195-218〕。それによれば、ガリシア・ナショナリズム前史におけるガリシア主義運動とは、中央集権主義に対する抵抗のイデオロギーであった。カトリック両王に始まる中央政府カスティーリヤの支配の下で、ガリシアは自治権を徐々に縮小され、19世紀には完全に奪われてしまったからだ。このような形態のガリシア主義が活発化したのは、第一次世界大戦中であつた。首都マドリッドではガリシア人グループが政治・文化関連の連続講演会を開き、1915年には『ガリシア研究』を発刊する。ガリシアでも、キューバから帰還したビリャル・ポンテ Villar Ponte¹³⁾によって『ガリシア・ナショナリズ

ム』が発表される。また、彼のガリシア語普及組織設立の呼びかけにより、「ガリシア語友の会」も設立された。このような気運の中、1918年11月、ガリシア語友の会は第1回会議をルゴで開催したが、それは当時「ナショナリスト会議」と称された。それゆえここに、ガリシア・ナショナリズムの誕生をみることもできる。しかしながら、実際にガリシア・ナショナリズム政党として「ガリシア主義党」(PG: Partido Galleguista) が結党されるのはさらに後年で、1931年12月のことであった。

その後ガリシア主義党がたどった道筋はここでは詳述はしない。だが、移民との関係において重要なのは、1936年のスペイン市民戦争勃発後、初期ガリシア主義が南米大陸で展開され、「遠隔地ナショナリズム」(B. アンダーソン) の様相を帯びていた点である。

既に1932年に自治推進会議で作成され、高い賛同率で市町村代表者会議において可決されていた「ガリシア自治憲章案」は、党内の分裂や国内政治の情勢に阻まれたものの、1936年6月28日にやっと住民投票にこぎつけ、賛成多数で可決された。その結果を、ガリシア選出議員がマドリッドに赴き、7月15日に国会議長に手渡したのだが、同月17日にスペイン市民戦争が勃発し、ガリシアは反乱軍の支配下に組み込まれることになる。この予測もしなかった事態の急変で、確実と思われた自治憲章案承認は実現に至らず、ガリシア主義党の指導者らは処刑された。つまり、ガリシア・ナショナリズム運動は、このとき自治憲章案を提出しにマドリッドに行き、難を逃れた者によって海外で展開される。とりわけ、彼らの中で最も重要な人物は、カステラオ (Alfonso Daniel Manuel Rodríguez Castelao)¹⁴⁾ であった。

カステラオとその仲間たちは、市民戦争の間、カタルーニャ自治政府の庇護の下で活動が続け、国会での憲章案の承認を追求したが失敗した。戦争終了後、彼らはアルゼンチンの首都ブエノス・アイレスに亡命し、同郷人組織「ガリシア・センター *Centro Gallego*」を基盤に、ガリシア主義運動を展開していった。カステラオは、ブエノス・アイレスでガリシア主義指導者として主導権を掌握していたが、彼のその権威的振舞いは、ガリシア移民の間では少なからぬ反感がもたれていた。彼は「ガリシア評議会」を設置して亡命共和国政府・国会と交渉し、バスク・

ナショナリスト党の協力を得て、自治憲章案の審議を推進した。フランス・パリに移った亡命政府に参加したカステラオは、そこでも憲章案の承認を要求したが認められず、1948年にブエノス・アイレスに戻る。そしてその2年後の1950年、カステラオは失意のうちに亡くなった。指導者を失った組織は分裂し、代わりにアルゼンチンにはフランコ政権の大使館が設置されると、ガリシア・ナショナリズム運動は力を失っていった。ここで事実上、初期ガリシア主義の時代は幕を閉じるのである。

その後、フランコ政権においては1946年まで国外移民禁止令により、それまでラテンアメリカに多く流出していたガリシア移民の足も途絶え、また、前述のとおり、国外移民が再開されてからも、移民先はラテンアメリカからヨーロッパ諸国、あるいは国内の工業都市へと移っていった。フランコ政権下において、バスクやカタルーニャの場合、それぞれ地域主義の拠点はフランス側に置かれていた。しかし先述したように、ガリシア主義の拠点は南米大陸にあり本国からは遠すぎた。それゆえにか、ガリシア移民の足が途絶え本国との関係も希薄になると、ガリシア主義自体も後退の一途をたどった。

このように、初期ガリシア主義は移民と関係し、地理的にも広がりを見せながら展開され、そして移民先において終焉した。しかし本国スペインにおいては、ガリシア主義は一部のエリート層・教養階層にのみ担われ、大多数の農民や漁民を内包することはなかった〔表10〕。また、移民先においては本国との往来も多く、ほぼ同時期に政治的組織などの支部が結成された。だがそれは同時に、本国における政治的対立が移民先にも持ち込まれたことを意味する。さらに移民先現地の政治運動や社会運動の影響を受けることで、移民先における政治的事態は一層複雑化していた。これに加えて、移民がガリシアの窮状を象徴し、ガリシア人が他のヨーロッパ移民よりも冷遇されていると感じる中、ガリシアを声高に掲げる地域主義政党の動きは、あまり歓迎されていなかった。つまり、ガリシア主義の担い手は、エリート層であって、大衆にはあまり広がらなかったのである。

では、労働者として移民した人びとは、現在のガリシア人の記憶に残っていないのだろうか。次節では、筆者のフィールドワークから、彼らの記憶を考察する。

表10 PG成員の職業構成 (%)

	PG : 1931 年	PG : 1936 年
聖職者・軍人	0.4	0.0
農業経営者・企業家	3.1	1.4
都市プチブルジョワジー（上層）	42.6	17.2
都市プチブルジョワジー（下層）	32.5	28.7
事務労働者・労働者	5.0	8.0
農民・漁民	4.2	32.7
学生	11.7	10.6
そのほか	0.4	1.3
職業が確認できる総数	607 人	3,835 人
史料で確認できる員数（職業不明なメンバーを含む）*	756 人	4,582 人

※ 都市プチブルジョワジー（上層）：上級専門職・上級公務員・大学教員・小規模商工業者・ジャーナリスト・中級専門職・高等教育教員

※ 都市プチブルジョワジー（下層）：中級公務員・個人営業・初等教育教員・職人・商業従業員

* 百分率は職業が確認できる層巢を分母としている。ただし、職業不明な員数を含めてメンバーの史料が残されている。

（出典：中塚 2000, p.212 から抜粋して筆者作成。※と*も前掲書から引用）

4-2. 現在における移民とのつながり

2009年9月、筆者は友人に誘われ、その夏ルゴで週末の土曜日に行われていた劇仕立てに演出された町のガイドツアーに参加した。これは、ルゴの旧市街地をガイドするものだが、町の重要建造物前や広場において、その場所とルゴの歴史に関する寸劇が行われ、訪問者に紹介するツアーであった。その中で、ルゴの歴史においても移民の話が登場し、彼らが常に胸に抱いていたものとして、「サウダーデ *saudade*」という言葉が紹介された〔写真1〕。サウダーデは、「不在や欠乏などから起こる、物悲しさと望郷がまざった悲しい気持ち。郷愁」と説明され¹⁵⁾、ガリシアを特徴的に表す言葉の一つに数えられている。つまり、移民は常に故郷を想い、いつの日か帰郷し、欠落していたものを埋めたいという気持ちを抱いているのだ。実際に、ほとんどの移民は帰国するつもりで海を渡ったが、一説によれば、帰国できた者は30%にも満たなかったという〔MURADO 2008 : 126〕。

筆者のフィールドであるルゴ県農村部では、現在でも時々、見知らぬ人が自らの生家を訪ねてくることがあるが、彼らはかつてラテンアメリカに渡ったガリシア移民である。既に述べたとおり、ガリシア

農村部では帰還移民が多いことからわかる通り、彼らには、必ずといっていいほどキューバやアルゼンチンに暮らす血縁関係者や親類がいる。しかし、現在でもコンタクトを取り合っているケースは稀である。現在、ガリシアにおいて移民を介したラテンアメリカとの関係は薄く、帰還移民を除けば、人の往来はほとんどない。

サウダーデは、このように帰りたくても故郷に帰ることができない遠い中南米に渡った移民の心情表現と捉えることができる。というのも、中南米に渡った移民に比べて、ヨーロッパ諸国へ向かった移民は、車や公共交通機関を使って頻繁に帰郷することができからである。実際に筆者がスイスで出会ったガリシア移民も、長期休暇ごとに車で故郷に戻ると話した。チューリヒからは、1日かからずにガリシアのどこへでも戻れるそうだ。

現在最も多いのは、ビルバオやバルセロナなど国内の他の地域に移住し、故郷の村またはその周辺に戻ってきた帰還移民である。彼ら帰還移民を基点に、ガリシアは他の地域と人的につながっている。ガリシアとそれらの地域の間では、未だに人の行き来があるのだ。例えばP行政区の中心地は人口3,500人ほどの町であるにもかかわらず、大きさの割には、バスク地域の各都市と結ばれる直通バス路線が何本

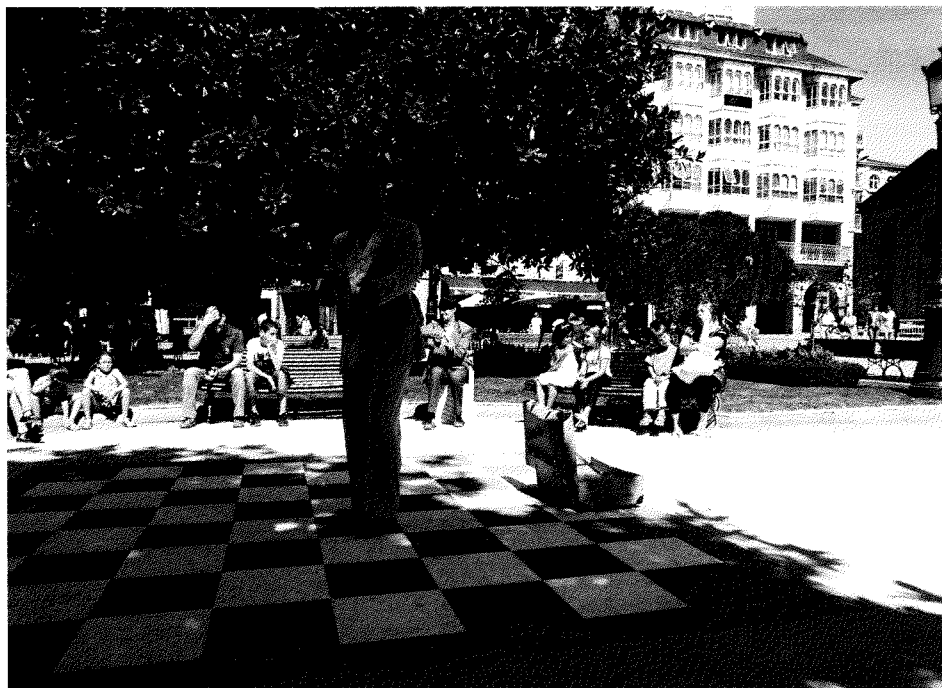


写真1 ガイドツアーの一場面（中心にいる男性は移民先から帰ってきてその経験を古い友人に話すという想定。傍にあるスーツケースには常に持ち歩いていたものとして、「サウダーデsaudade」と書かれている）

も設けられている。これはバスク地域との関係性を示す一つの例である。

また、毎年9月半ばに行われるP行政区内のS教会区の聖人祭には、普段、スペインの大都市またはその周辺に住んでいる村出身者、あるいはその親類が集まってくる〔写真2、3〕。2009年の村祭りで、インフォーマントであるP家には、主に母方の親戚が集まり、3人で暮らす家に約20人が一堂に会した。その内、ビルバオに住む者が8人、S村が属するルゴ県の県都に住む者が3人、その他は近隣の村や町に住む者であった。彼らの話によると、その年は人の不幸や子供の受験などが理由で、例年よりも遠方に住む親類が集まる人数は少なかったそうだ。S教会区にはこのような家庭が数十戸ある。年に一度の祭りの機会には、普段は静かで人通りもほとんどない村々は一変し、賑わいを見せる。

P家に集まった親戚の場合、ガリシア語を話せる者とそうでない者の2種類に分けられる。ガリシア出身で自らが移民した世代（ガリシア語話者）と、移民先で生まれた2世（ガリシア語は理解できるが、カスティーリャ語で話す者）がいる。P家の3人の子供のうち2人は親の移民先で生まれている。1人はビルバオで、1人はガリシア内の大都市で出生し

ているのだ。彼らは親が常にガリシア語を使用し、S教会区での生活も長いので、ガリシア語話者であり、ビルバオに住む従兄妹達ともガリシア語で話す。既にガリシア語を母語としない「ガリシア人」にとっても、ガリシア語話者との直接的な交流は、自ら話せないまでも、会話を理解する程度の言語能力を維持することになる。それは、彼らが故郷を離れても自らがガリシア出身者である事実を再確認する機会となるであろう。こうした交流は、村祭りの他にも、冠婚葬祭のときに持たれている。

5. おわりに

以上のことをまとめると、ガリシアを表象する「移民」という要素は、域外への移民流出現象がほぼなくなった現在においても、ガリシア人にとって重要な意味をもつ。それは、単なる地域の過去の「歴史」ではなく、移民した家族や親類との実際の交流を通じて確認される身近な事実なのである。すなわち、ガリシア主義のような政治的イデオロギーとは異なるレベルで想起され、移民した人びと、またはその子どもたちとの交流を通じて体験される、「生きられた記憶」といえる。それは、ガリシア在住のガリシア人にとってのみならず、移民先に住み着い



写真2 S教会区の祭りの様子（雨が降ってもテントを立て、バンドの生演奏にのって踊る。手前側には飲み物を注文できるカウンターが設けられ、足腰の悪い老人は座ってみんなが踊る様子を見ている。）



写真3 S教会区の祭り期間中のP家での食事（大テーブルを出して、大量の食事でビルバオに住む親戚を迎え入れる。台所には他にも来客などが同時に食事をしている。）

た人びとにも共有されるものである。

また興味深いのは、そのような生きられた記憶としては、スペイン国内またはヨーロッパ諸国に渡った移民を介している場合が多いが、ガリシアの表象として「移民」が取り上げられるときは、ルゴのガイドツアーの例でも見たとおり、常にラテンアメリカに渡った移民と結びつけられる点である。筆者がガリシア人と交わす会話においても、ガリシア移民の話をする、たいていは「オジがアルゼンチンにいらしい、会ったことはないけれど」、「遠い親戚がキューバにいる。いつか会いに行きたいが、連絡先がもうわからない」といった、ラテンアメリカに関連させて話をする。

つまり、彼らの中では移民に関して「二つの記憶」があるのではないか。一つは、ガリシアやガリシア人表象として作用する移民の記憶、すなわちラテンアメリカとの深い関わりである。ここにはガリシア主義が展開された歴史も大きく関わっていた。もう一つは、現在でもつながりを保っているが、ガリシア主義とはほとんど関係のないもので、これはスペイン国内またはヨーロッパ諸国に渡った移民の記憶である。

本稿では、ラテンアメリカにおけるガリシア移民の歴史をガリシア主義の展開に限ってみてきたが、フィールドワークから得られたデータと対照させたことにより、現在のガリシアと「移民」の関係性がある程度まで捉えることができたと思う。

しかし、移民に焦点を当ててガリシアの地域性を分析しようとすれば、域内の異なる場所における記憶をさらに収集する必要があるだろう。また、ガリシア移民の重層性や多義性の解明には、ラテンアメリカからの帰還移民、あるいはガリシアとの関係を持たずに流入してくる外国人移民に関しても調査すべきであろう。これらの点は今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、早稲田大学人間総合研究センターから助成を受けた「多世代・多文化共生社会における社会・文化環境の構想」プロジェクト(2007～2009年度)の成果の一部である。記して感謝いたしたい。

【註】

- 1) バスク語話者が15.7%、カタルーニャ語話者が36.6%に対し、ガリシア語話者は50.3%である。

ただし、バスク語の場合、「母語」としてのデータではなく、完全なバイリンガルのデータである。

- 2) 中塚は続けて、移民という安全弁がなければ、青年が政治活動に加わり、ガリシア主義の担い手になったかもしれないと指摘している [中塚 2000: 201]。
- 3) パーセンテージにして41%。
- 4) ガリシアを他とは異なる地域として説明する場合、疑うことなく「ガリシアは端にある」と表現する。この「端」の意味は、地理的な位置に関する以外にも特徴があり、それらは「疎遠」「周縁性」「低開発」「田舎」であり、これらの評価はガリシアに対しても当てはまり得る [GONZÁLEZ, R.C.L, RODRÍGUEZ GONZÁLEZ, R., SANTOS SOLLA, X.M. y SOMOZA MEDINA J. 2001: 210]
- 5) その他にはベネズエラ、ブラジル、メキシコが挙げられる。
- 6) スペイン市民戦争の期間は1936～1939年である。
- 7) 当時は西ドイツであった。
- 8) ここでは、行政の最小単位であるムニシピオ *municipio* において役所が置かれた町のことを指す。規模としては、日本で言うところの「町」に至らず、「村」とも捉えかねないが、ここでは、人口が200や300程度であっても行政機関や金融機関が集中している場所なので、便宜的に「町」としている。
- 9) 1981年には198,042人だった外国人労働者は、20年後の2001年には5.6倍の1,109,060人に増加した [HERNÁNDEZ BORGE 2003: 156]。
- 10) ガリシアにおける外国人移民に関しては、HERNÁNDEZ BORGEの論文が参考になるだろう [HERNÁNDEZ BORGE 2003]。
- 11) 「プロビンシアリスモ *provincialismo*」(1840～1885年)、「地域主義 *regionalismo*」(1885～1916/1918年)、そして「ガリシア・ナショナリズム *nacionalismo gallego*」(1916/1918年以降)の3期に時期的に画期される。
- 12) 1931年に王政をしいていた国王アルフォンソ13世が退位してから、スペイン市民戦争 *Guerra Civil* が樹立するまでの時代。
- 13) 作家・ジャーナリストであり、政治的活動家であった人物。

- 14) ガリシアの父と称される人物で、1886年にア・コルーニャ県の海岸地域にあるリアンショ Rianxo で生まれ、9歳のときに父親の住むアルゼンチン・ベルナスコニ Bernasconi に移民している。1900年、14歳のときにガリシアに戻り、学業を経て、医者・作家・風刺画家・政治家として活躍する。ガリシア評議会の議長も務めた。スペイン市民戦争勃発後、ガリシアを離れガリシア主義の活動の続け、ニューヨークを経て1940年アルゼンチンのブエノス・アイレスに向かう。1950年に亡命先のブエノス・アイレスにて没。
- 15) ガリシア語—スペイン語辞書より [Diccionario Normativo Galego-Castelan]。

【参考文献】

- アンダーソン, B. 1997, 白石隆・白石さや訳『想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行』, NTT出版
- ANTUÑA SOUTO, C.A. 2000, “El nacionalismo gallego (1916-1936) :”, Una madurez inconclusa, en *Espacio, Tiempo y Forma, Serie V. Hª Contemporánea, t. 13*, UNED.
- BERAMENDI GONZÁLEZ, J. 2005, “El galleguismo político (1840-1936)”, en DE JUANA LÓPEZ, J. y PRADA RODRÍGUEZJ. (coords.), *Historia contemporánea de Galicia*, Barcelona: Ariel.
- BERAMENDI GONZÁLEZ, J. y NÚÑEZ SEIXAS, X.M. 1995, *O nacionalismo galego*, Vigo: A Nosa Terra.
- COSTA CLAVELL, X. 1983, *Los gallegos*, Vigo: Xerais.
- DE JUANA LÓPEZ, J. y VÁZQUEZ GONZÁLEZ, A. 2005, “Población y emigración en Galicia”, en DE JUANA LÓPEZ, J. y PRADA RODRÍGUEZJ. (coords.), *Historia contemporánea de Galicia*, Barcelona: Ariel.
- HERNÁNDEZ BORGE, J. 2003, “La inmigración exterior en Galicia”, en *Papeles de Geografía* 37, Murcia: Univ. Murcia.
- 岩本通弥編 2003, 『記憶』, 朝倉書店
- LOIS GONZÁLEZ, R.C. 1998, *Xeografía de Galicia*, Vigo: Obradoiro.
- LOIS GONZÁLEZ, R.C.L, RODRÍGUEZ GONZÁLEZ, R., SANTOS SOLLA, X.M. y SOMOZA MEDINA J. 2001, “Galicia y la polisemia del término región”, en *Boletín de la A.G.E. n° 32*, Madrid: Asociación de Geógrafos Españoles.
- MURADO, M.A. 2008, *Otra idea de Galicia*, Barcelona: editorial Debate.
- 中塚次郎 2002, 「ガリシア主義の歴史 —『ケルトの神話』から急進的社会主義へ」, 立石博高・中塚次郎編『スペインにおける国家と地域』, 国際書院
- NEGUEIRA ROMÁN, C. 2008, “Galicia en la unión europea. Una economía emergente”, en *Revista Galega de Economía, vol. 17*, A Coruña: Univ. Santiago de Compostela.
- RODRÍGUEZ GONZÁLEZ, R. 1997-a, *La urbanización del espacio rural en Galicia*, Barcelona: Oikos-tau.
- RODRÍGUEZ GONZÁLEZ, R. 1997-b, “Villa y comarca funcional en Galicia”, en *Investigaciones geográficas, núm. 18*, Alicante: Instituto Universitario de Geografía (Univ. Alicante).
- 立石博高 2002, 「国民国家の形成と地域ナショナリズムの擡頭」, 立石博高・中塚次郎編『スペインにおける国家と地域』, 国際書院

【参考資料】

- http://www.ico.es/web/descargas/paginas/1704044_Situacion%20%20Economica%20Galicia%2007-07-09.pdf (“Situación Económica de Galicia”)
- <http://www.20minutos.es/noticia/380788/0/catalan/lengua/idoma> (“20minutos 2008年5月20日”)
- <http://diariovasco.com/20090425/al-dia-local/tercio-vasco-bilingues-propocion-20090425.html> (“Diario vasco” 2009年4月25日)
- <http://www.lavozlibre.com/noticias/ampliar/4009/encuesta-del-cis-el-gallego-es-la-lengua-materna-para-el-503-de-la-poblacion-de-galicia> (“La voz libre” 2009年6月17日)